

スピーキングの指導と評価の一体化に向けて

工藤 洋路

1. 話す活動における「目的・場面・状況」の設定

年度初めの最初の英語の授業で、よく行われるスピーキング活動として「自己紹介」がある。この自己紹介は、新しいクラスになったばかりということで、クラスメイトのことを知ることが目的となっている場合が多い。一方で、新しいクラスとはいえ、すでに知っているクラスメイトが多くいる場合、「名前」「年齢」「所属している部活」などを伝え合うことには違和感を覚える。英語の授業は、将来実際に英語を使う場面を想定して、そのシミュレーションを行う場と捉えたと、すでにある程度お互いのことを知っている友人同士で、あたかも初めて会ったような自己紹介をするのは不自然である。そこで、以下のように、自己紹介を行うことに適した場面を複数設定して、実際にその場面であればどのような自己紹介をするかを考えて、場面ごとに自己紹介を行う活動を行ってはどうか。

場面 1	学校に来たばかりの ALT に昼休みに話しかけられて、自己紹介をする場面
場面 2	海外の高校に短期留学をすることになり、初日に現地の高校のクラスで自己紹介をする場面

同じ自己紹介でも、場面の設定や状況が変われば、話す内容が変わる。場面 2 ではおそらく *I'm from Japan.* (あるいは *I come from Japan.*) と言うが、場面 1 ではそれを言うのは不自然になる。このように内容が変われば、使う単語や表現、そして文法事項も変わる。このことに生徒自身が気が付くことは、英語を学習する上で非常に重要になる。普段の学習では、教科書が言語活動中心のものであっても、まずは単語や文法を学習して、それからそれを使う活動に取り組むという流れを想定している生徒は多いだろう。言語材料を少しずつ積み上げていくことは

大切ではあるが、この「言語材料ファースト」の学習は、実際の言語使用のプロセスとは異なる。実際は、まず「伝えたいこと」があり、その内容を伝えるのに最も適した単語や文法事項を、自分の言語材料のレパートリーから選択して使うプロセスをたどる。つまり「伝えたいことファースト」である。

〈普段の英語学習〉

- ① まずは単語や文法といった言語材料を学ぶ。
- ② その単語や文法を使う活動を行う。

〈実際の英語使用場面〉

- ① 伝えたいことがある。
- ② その内容を伝えるのに適した単語や文法を選んで使う。

教室環境であっても、先述した複数の場面を設定した自己紹介の活動例のように、実際の英語使用場面のシミュレーションをすることで、「伝えたいこと→言語材料」というプロセスに導くことができる。言い換えれば、コミュニケーションの「目的・場面・状況」を設定した上で、スピーキング活動に取り組むことが大切である。

2. 「指導と評価の一体化」の在り方

小・中・高等学校の現行の学習指導要領では、「話すこと」は「話すこと(やり取り)」と「話すこと(発表)」という2つの領域として設定された。この2つの領域は同じ話すことでも、必要な知識やスキルが異なるため、片方に習熟すれば、もう片方も自動的に習熟するという考えにくい。スピーチが得意な生徒が必ずしも、対話や会話が得意というわけではないのは、英語の教師であれば経験的に理解できるであろう。このことから、普段の授業でチャットなどを通して「話すこと(やり取り)」の能力を育成しているのであれば、それを評価するため

のテストでは、スピーチといった「話すこと(発表)」のタスクを設定するのではなく、「話すこと(やり取り)」に関わるタスクを用いて評価する必要がある。しかしながら、話すことの評価を各生徒に対して個別に行うとなると時間と労力を要するため、毎回の授業で行っているチャットについては、それに関わるパフォーマンス・テストは実施せずに、学期に1回または年に1回程度しか行わないスピーチを話すことの主な評価材料にしているケースはよく見られる。話すことの「指導と評価の一体化」は、計画性を持って意図的に指導と評価を設計しないと、その担保が難しい。

現行の学習指導要領では、次のように、育成すべき3つの資質・能力にそれぞれ対応したものとして評価のための3観点が設定された。

資質・能力	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	↓	↓	↓
評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度

この3つの資質・能力および評価の3観点を見据えた指導と評価については、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校外国語』（文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター、2021）にいくつかの事例が掲載されている。ここから事例を1つ取り上げて、ここでは、話すことの指導と評価の一体化に向けた考え方を提示する。次の事例は「話すこと(発表)」の領域のものであり、上記の参考資料で示されているテストの指示文および採点の基準は以下のとおりである。

〈テストの指示文〉

自分が住む町について、①よりよくしたいことを指摘し、②なぜよりよくしたいのか、③そのためどのような行動を取りたいかの3点について、1分程度で話して伝えましょう。準備時間は10分です。メモを用意して、必要に応じてメモを参照しながら話しても構いませんが、原稿を書くことはできません。

〈採点の基準〉

(知識・技能)

a	・語彙や表現が適切に使用されている。 ・聞き手にわかりやすい音声等で話して伝えている。
b	・多少の誤りはあるが、理解に支障のない程度の語彙や表現を使って話して伝えている。 ・理解に支障のない程度の音声等で話している。
c	「b」を満たしていない。

(思考・判断・表現)

a	三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを詳しく述べて伝えている。
b	三つの条件を満たして話して伝えている。
c	「b」を満たしていない。

(主体的に学習に取り組む態度)

a	三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを詳しく述べて伝えようとしている。
b	三つの条件を満たして話して伝えようとしている。
c	「b」を満たしていない。

このテストでは、指示文の①～③に見られるように内容に関わる条件が設定されている。ただし、①～③について、どんな内容をどのように伝えるのがよいかといった具体的な事柄は生徒自身が考える必要がある。その際、どのような状況で誰に向かって何のために「自分が住む町」について伝える必要があるかというタスクの「目的・場面・状況」が欲しい。先述した自己紹介の例で見たように、「目的・場面・状況」がなければ、具体的な内容が定まらないからである。そこで、この指示文に以下のものを加えてみる。

- ・役場が企画した「より良い町づくりコンテスト」でスピーチをすることになった。
- ・外国人の方からも発表があるので、英語で発表する。
- ・審査員から高い評価を受けた提案については、予算がついて、役場がその実現に向けて動く。

こうした「目的・場面・状況」が加わったことで、このスピーチでは、実現可能性のある提案をする必要があり、また、多くの人にアピールできるように工夫をする必要がある。アピールするためには、「思考・判断・表現」の基準にあるように、関連し

た情報を話したり、自分の考えを詳しく述べたりすることなどが必要になる。このように、伝える内容を生徒が工夫するような設定を活動やテストに組み込むことで、「どのような内容を伝えることが適切か」ということに生徒は意識を向けるようになる。この内容の適切さが「思考・判断・表現」の評価の観点に大きく関わる。内容を工夫してそれがしっかりと伝わるように話せたかどうかを評価するのが「思考・判断・表現」の観点、そして、工夫を試みているかどうかを評価することは「主体的に学習に取り組む態度」の観点が担うことになる。そして、使った語彙や表現などの言語材料にフォーカスするなら「知識・技能」の観点の評価になる。

このような3観点による評価の枠組みを定めた上で、パフォーマンス・テストを実施することが大切になるが、それ以上に、そのテストに向けてどのような指導をしてきたかがより大切になる。事前の指導の中で、類似した発表活動を行った際に、仮に「目的・場面・状況」が設定されていないタスクを使用したのであれば、それに応じて伝える内容を工夫して考える練習をしていなかったことになる。その場合は、テストにおいて「思考・判断・表現」の観点の評価することはできない。また、「知識・技能」の基準にある「聞き手にわかりやすい音声」で話すことに関して、事前の指導において、どのように話すことが聞き手にとってわかりやすいかを指導していない場合は、同様に、テストでの「知識・技能」の評価の観点に「音声の分かりやすさ」を入れることはできない。言い換えれば、教師が指導をして生徒が学習をしていること以外の要素は、テストの際に評価の対象とすることは避けるべきである。なぜなら、それでは「指導と評価の一体化」がなされないからである。よく見る指導と評価の不一致の例として、文法の誤りへの対応が挙げられる。授業では間違いを気にしないでたくさん話そうと生徒に指示した一方で、テストでは「正確性」の観点が登場する。これでは「指導と評価の一体化」がなされない。定期試験のように、ある一定期間の指導がベースにある評価では、「指導と評価の一体化」を担保するようにテストの評価の規準を設定することが必須となる。

3. 「指導と評価の一体化」を目指した指導例

先に見た例は「話すこと(発表)」のものであった

が、ここでは「話すこと(やり取り)」の例を取り上げて、指導と評価の一体化を目指す指導を考える。取り上げるのは *Speaking Gym Standard* (津久井・工藤, 2019) の以下のロールプレイ活動 (Unit 3: Activity 9) である。

設定 (Aさん役)	You are on the track team. You and your partner were chosen as runners in a relay race. Persuade your partner to come to practice early in the morning. Tell your partner the two things below: 1) You want to practice to win the important relay race next week. 2) Your partner is the fastest runner on your team. You need him/her! You start the conversation.
設定 (Bさん役)	You are on the track team. You and your partner were chosen as runners in a relay race. Your partner is going to ask you to practice early in the morning. You should tell your partner the following two things. 1) You don't think you need to come to school early in the morning to practice. 2) You work part-time delivering newspapers in the morning. If you think your partner's suggestion is reasonable, you can agree with his/her idea.

この活動に関して、指導と評価の一体化を目指すためには、評価タスクを事前に検討する必要がある。本教材には、Challenge 3 という類似タスクを行うページがあるため、この類似タスク(=上記の活動の平行タスク)を評価タスクとして使うことができる。もし平行タスクが教科書や教材にない場合は、教師が作成する。この Challenge 3 で設定されているタスクの概略は「AさんとBさんは一緒に英語のプレゼンテーションを行うことになっており、AさんがBさんに一緒に練習することを提案する」というものである。Activity 9 のタスクでも Challenge 3 のタスクでも、Aさんには「勧誘、依頼、説得」、Bさんには「断り、妥協、受諾」といった言語機能がそれぞれ求められている。従って、Activity 9 を指導する際は、これらの言語機能を果たすための方法にフォーカスすることが必要になる。例えば、Aさんの方であれば、Can you come to practice early

in the morning? という勧誘に関わる文を言うだけでなく、I really want to win the race. や The race next week is the biggest race of the year. といった自分の思いや客観的事実を述べることで、より説得力が増すことなどを指導したい。これにより、「お願い+気持ち+状況」といった話す内容に関わる要素を学習することができ、これらの要素について話すという技術は、この活動だけではなく、先に示した評価タスクでも利用可能なものとなる。

では、授業で活動を行う際に、このようなストラテジーの指導はどのタイミングで行うことが効果的であろうか。大きく分けて、ペアでタスクに実際に取り組む前と、一度取り組んだ後の2つのタイミングが考えられる。タスクに取り組む前にそのタスクで必要なストラテジーのトレーニングを行うことで、タスクではスムーズなやり取りが可能になる。逆に、タスクに取り組んだ後にストラテジーを教えると、タスクでの自分のパフォーマンスをふり返ることができるため、そのストラテジーの有用性により気が付くことが可能になる。ただ、気が付いただけでは身につく段階までにはいかないため、もう一度同じタスクに取り組む必要がある。いずれのタイミングにおいても、そのタスクのパフォーマンスを向上させることだけではなく、テストタスクなどのパラレルタスクにおいても対応できる汎用性のある力を育成することを念頭において指導を行うことがポイントとなる。

そして、テストタスクの評価においては、このストラテジーの使用により達成できることを観点に組み込むことにより、指導と評価の一体化の実現が可能になる。先に取り上げた *Speaking Gym Standard* のパラレルタスクの Challenge 3 では自己評価のためのツールとして次のものが掲載されている。

3	相手が折り合えるように提案を変えるなどして説得することができていた。
2	状況を伝えて何とか説得することができていた。
1	状況は伝えたが説得することができていなかった。

この自己評価では、お願いや説得に関わる英文を話すだけではなく、説得に応じてもらうために、状況を詳しく伝えることなどが組み込まれている。従って、「お願い+気持ち+状況」について話すというストラテジーを学習した上であれば、指導と評価

の一体化が保たれる。このように、学習タスクとそのパラレルな位置づけになる評価タスクを設定して、指導のポイントと評価のポイントを合わせることによって、学習したことを汎用的に使える能力が身につくことに繋がる。

4. 生成 AI 時代のスピーキング指導

昨今、生成 AI の登場により様々な学習に影響が出つつある。生成 AI のツールに音声機能を追加することなどで、かなり自然な英会話の練習もできるようになった。授業中に生徒が生成 AI にアクセスして個別に練習することは今後増えていくだろう。しかしながら、生徒たちのこれまでの学習成果や教科書の内容など、教師であれば把握している事柄は生成 AI はデータとして持っていない。また、人間と違って、生成 AI 自体に考えや好みなどがあるわけではない(指示を出せばそれを装ってはくれるが)ため、真の意味でこちらに共感してくれたり、否定してくれたりすることはない。さらに、これまで述べてきたような「指導と評価の一体化」を目指しながら、生成 AI が生徒の会話の相手をしてくれることは、よほどうまく指示(ChatGPT であればプロンプト)を設定しない限りは難しい。1つのパラレルタスクを作成したり、音声認識機能を使ってある生徒の1つのパフォーマンスの採点をしてくれることは生成 AI に頼ってもよいが、様々な要因を考慮しながら、指導と評価の一体化を目指すことは、教師の方が得意であり、また、そこに教師の存在価値があると言える。授業で話す活動に取り組んで、そこで必要な技術を学ぶことで、テストでもよいパフォーマンスが発揮でき、そして、話すことの汎用的な能力が身につくことを生徒が実感する指導を行っていくことが大切である。

参考文献

津久井貴之・工藤洋路(2019). *Speaking Gym Standard*. 数研出版.
文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2021). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 外国語』東洋館出版社.

(玉川大学 教授)